

県研究指定校事業

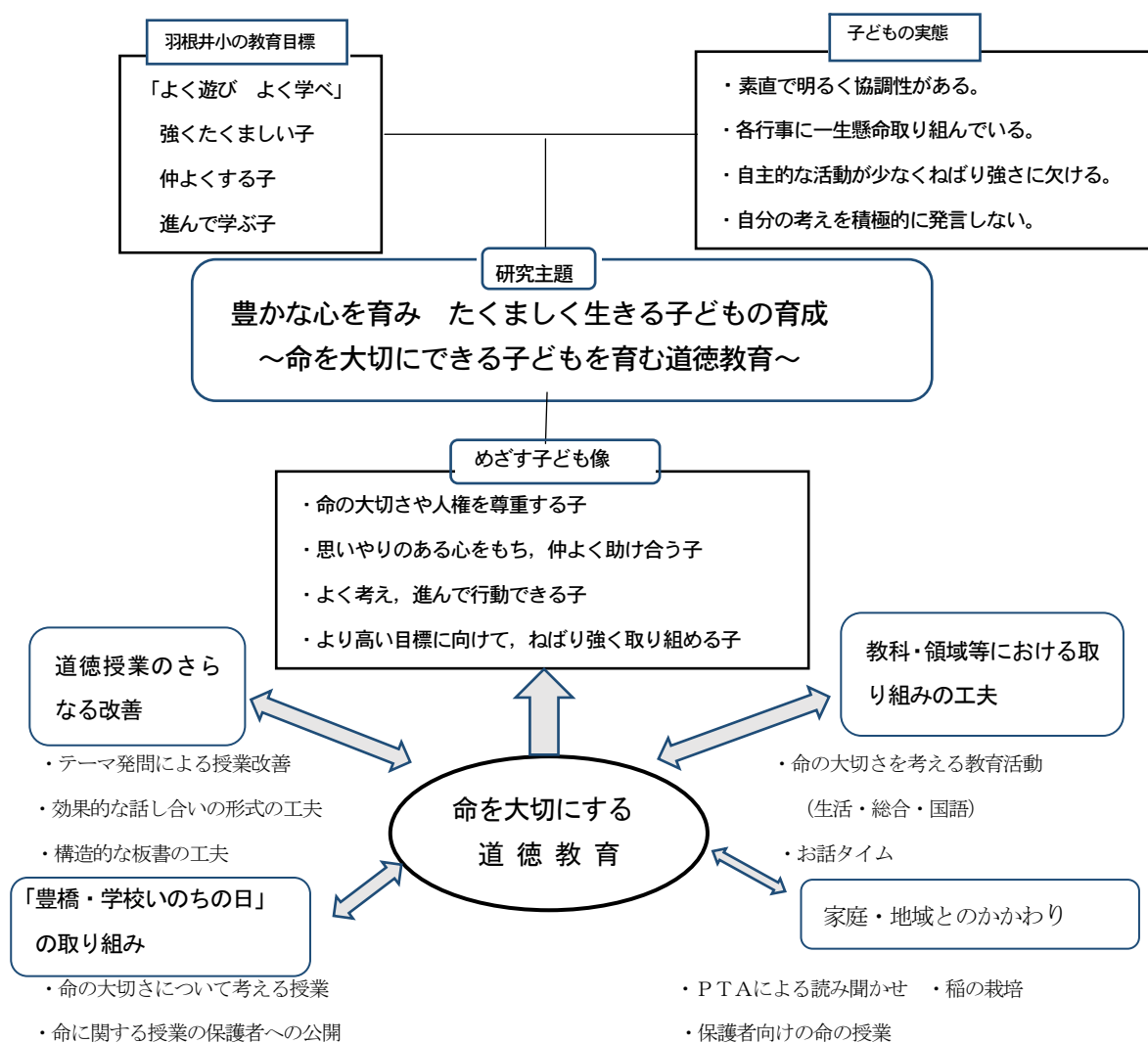
豊橋市立羽根小学校

研究主題 「豊かな心を育み たくましく生きる子どもの育成」

研究概要

羽根井小学校は、愛知県教育委員会より1年間の研究委嘱を受け、平成25年4月から研究主題「豊かな心を育み たくましく生きる子どもの育成」に取り組んできた。「命を大切にできる子どもを育む道德教育」をサブテーマとして、「豊橋・学校いのちの日」を中心とする道德の授業での取り組み、生活科や総合的な学習など教科・領域における道德的な実践、家庭・地域とのかかわり等のあらゆる面において、命について考える機会を設定し、子どもたちが命の大切さを実感し、たくましく思いやりのある心をもつように努めた。研究構想は以下の通りである。

(1) 研究構想



(2) 研究の内容

① 「豊橋・学校いのちの日」に命の大切さをテーマにした道德の授業を行い、保護者に公開する。

② 道徳授業のさらなる改善を図る。

ア 子どもの問題意識や疑問を出させ、多様な感じ方や考え方を引き出すために、児童の意識

に沿った発問や、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問など、授業のねらいにかかわる中心的な発問（東京学芸大学の永田繁雄教授・前文科省教科調査官が提唱している「テーマ発問」）を工夫する。

イ 子どもが思考を深める手がかりとなるように、思考の流れや順序を示すような順接的な板書だけでなく、違いや多様さを対比的、構造的に示したり、中心部分を浮き立たせたりするなど、教師が子どもの考えを取り入れ、子どもとともにつくっていくような板書の工夫をする。

ウ 校内で授業研究会を計画的に実施するとともに、他校で行われる研究会に積極的に参加して授業力向上や道徳に対する実践意欲をもつ。

③ 学年、発達段階に応じた話し合いにするための「お話タイム」の充実を図る。

④ 多様な教育活動で命の大切さについての理解を深めていく。

⑤ 家庭や地域との関わりを通して、命を大切に作る心や感謝の気持ちを育てる。

(3) 研究の実践

月	内 容
4	・部会（研究テーマ・年間計画の検討） ・明陽苑との打ち合わせ
5	・全体会（授業検討会） ・部会（研究課題の検討） ・明陽苑との交流①②
6	・豊橋・学校いのちの日（授業公開） ・研究授業4・5年 ・PTA読み聞かせ
7	・研究授業若草 研究協議会開催 ・部会（中間報告）
8	・明陽苑との交流③ ・全体会（学習会・道徳全般） ・環境整備
9	・明陽苑との交流④ ・公開お話タイム（全学級） ・PTA読み聞かせ
10	・研究授業2・3年 ・「命」俳句コンテスト応募 ・PTA読み聞かせ
11	・研究授業1・6年 豊橋市道徳研究部授業研究会 ・明陽苑との交流⑤
12	・研究授業5年 研究協議会開催（永田教授の招へい） ・「子どもとともに作る新しい道徳授業」学習会 ・部会（研究のまとめ方）
1	・全体会（学習会・テーマ発問） ・全体会（研究のまとめ）
2	・全体会（学習会・板書） ・部会（研究のまとめ）
3	・本年度の反省と来年度の計画

研究の成果

1年間という短い期間であったが、本研究を通して、次のような成果が認められた。

(1) 「豊橋・学校いのちの日」の取り組みにおける成果

「豊橋・学校いのちの日」について 平成22年に市内の中学校で野外活動中に起きた死亡事故を教訓として、市内全小中学校を挙げて安全や危機管理に対する意識の維持・向上をはかるとともに、事故の起きた6月18日を中心に、全市一斉に教師と子どもたちが「いのち」の大切さについて考える日としている。
--

6月の学校公開日に、各学年「いのちの日」に合わせた授業を行った。多くの保護者に囲まれて、子どもたちは真剣に授業を受け、「いのち」について考えることができた。

① 1年生 『ぴよちゃんと ひまわり』『チョビ君のたからもの』（出典：学習研究社）

いつもにこにこして、いろいろなことを教えてくれたやさしいひまわりが枯れてしまったとき、子どもたちは「枯れちゃだめ」「かわいそう」と、気持ちを伝え合った。その後のお話で、ひまわりの赤ちゃんの存在を知った子どもたちは、命が続いていくことについて考えた。どの子も優しい気持ちで、ぴよちゃんに手紙を書くことができた。

② 2年生 『きつねとぶどう』（出典：「あかるいころ」）

母ぎつねが自分を犠牲にして子ぎつねを守るお話を読み聞かせ、授業をすすめた。「お母さん、ありがとうございます」と言ったとき、どんな気持ちだったかを中心に話し合った。子どもの命を守ろうとした母ぎつねへの感謝への発言がたくさんでた。振り返りノートには、家族をはじめとして、たくさんの人々に守られてることに気づいたものや、家の人へのお礼を書いたものが多く見られた。

③ 3年生 『かわいそうなぞう』（出典：金の星社）

絵本の「かわいそうなぞう」の読み聞かせを行った。戦争がはげしくなる中、動物園の飼育員が象たちを殺さなければならなくなった物語を聞いて、死んでいこうとする象のトンキーやワントリーたちの気持ちを話し合った。子どもたちは「殺されるのはかわいそう」「悲しい」という考えを出したが、「戦争なんてないほうがいい」という意見も出てきた。

④ 4年生 『人間愛の金メダル』（出典：文溪堂「4年生のどうとく」）

オリンピックのヨットレースに参加したキエル兄弟。ライバルの生命の危機に際し、キエル兄弟が何を思い、どう行動したかについて話し合った。子どもたちからは、「人間の命は一つ。助けて当たり前」「金メダルより人命が大事」「自分も困っている人を助けたい」などの意見が多く出た。キエル兄弟の心の葛藤について深く考え、生命を大切にしようという気持ちを高めることができた。

⑤ 5年生 『命のアサガオ』（出典：文溪堂「5年生の道徳」）

白血病とたたかい、7年間の短い生涯を閉じた光祐君の生き方を見つめ、一番心を動かされた場面について、みんなで考え、話し合った。自分が病気なのに、友だちや家族を励まし、最後まで精いっぱい生きた光祐君の姿に深く感動したという意見が多く出た。保護者のアンケートには、命の大切さがわかる授業、子どもたちの心に残る授業だったという感想が多くあった。

⑥ 6年生 『猛火の中で』（出典：「明るい心」）

関東大震災で火災から逃げる主人公が、助けを求められ、どうしたかを話し合った。「自分の命が大切だから逃げた」や「目の前で困っているのだから助けた」などの意見が出された。子どもたちは、話し合いを通して、自分の命を守るためには、人と支え合い助け合う中で、他人の命も大切にしないといけないことを感じ取っていた。

⑦ 若草（特別支援学級） 『大きくなったよ』

子どもたちがこれまでどれだけ大きくなってきたのかわかる授業をした。子どもたちは、自分の誕生時の身長と同じ長さの紙テープと現在の身体の高さをうつした型紙とを比べ、成長を実感したようだ。また、赤ちゃん人形をだっこして、小ささに驚いたり、家族がいろいろ世話をしてくれたことに気づいたりして、家族に感謝の気持ちをもつことができた。

（2）教科・領域等における取り組みの成果

① 道徳授業の充実

・テーマ発問を取り入れた授業展開の実践

一般的な場面展開による発問以外に、テーマ発問を積極的に取り入れ、児童自らが問いをも

って臨める授業を展開した。多様な感じ方・考え方を基に、子どもたちが磨き合える授業、魅力・活力のある授業づくりを目指した。テーマ発問による授業展開により、子ども自身が、授業を通じて話し合う主題を理解でき、多様でより深い話し合いが行えている。テーマ発問では、主に「登場人物の生き方を問う」場合、「資料を問う」場合、「主題となる価値や内容を問う」場合があり、資料や子どもの実情に合わせて発問の仕方を変えている。テーマ発問を積極的に取り入れたことで、子どもたちは望まれた答えではなく、本音をぶつけることが多くなった。そして、本音を出し合うことで多様な意見や価値観を共有でき、自分にはない新たな価値を取り入れることができている。『オタマジャクシのうんどうかい』（出典：講談社）から抜粋した資料をもとに行った5年生の授業では、「主人公がしたことは本当の親切か」というテーマ発問で展開された。子どもたちは、「友達のことを考えてしたのだから親切だ」「考えたけど、タマが納得していないから親切ではない」「心配して考えたことは親切だけど・・・」など、それぞれの立場で自由に意欲的に発言する姿が見られた。そして、子どもの発言をもとに、本当の親切とはどうすることかについての考えを深めていくことができた。

・構造的な板書の工夫

道徳の授業では、縦書きの板書が多く見られるが、意見の違いを類型化し、対比させることで子どもの思考を助けられるように、板書を横書きにして構造的に示すことにした。まず導入では、ねらいにかかわる子どもの経験を黒板左側に書いた。展開部分の発言内容を黒板中央に類型化して書き示し、それぞれの意見の違いをわかりやすく引き立たせることにした。子どもたちは、自分はどの立場かが明確になり、また、黒板を見ながら友達の意見との違いを明らかにして発表することができた。さらに、意見をつなぐ矢印、キーワードのアンダーライン、本時のテーマにかかわる意見には、色チョークや囲みなどの工夫をし、子どもたちにわかりやすい板書を心がけた。また、黒板の挿絵は、主人公の表情がわかる絵をあえて避け、シルエット絵などで提示することによって、主人公の表情にとらわれることなく、子どもの考えを引き出すことができた。

・話し合いの形式の工夫

子どもたちが、相互に学び合い、考えを深めていけるように座席の配置をコの字型にして授業をすすめた。また、中心発問では、自分の考えを発表したり友達の考えを聞いたりする中で多様な考えを引き出すために、グループトークを取り入れた。特に、司会者などは決めず、グループ独自のやり方で自由に話し合わせた。全体の場合では、なかなか意見を発表できない子もグループでは安心して発表できた。また、自分の考えに自信をもてない子は、友達の多様な考えを聞くことで、自分の考えに自信をもち、話し合いに参加することができた。その後の全体トークでは、グループトークを生かし、子どもたちは、自分の立場をそれぞれ明確にして発表し、考えを深める話し合いができた。

・研究会の積極的实施と参加

道徳の授業力向上を目指し、校内での道徳研究を進めてきた。特に、多くの授業研究会を実施し、他校の先生方を招いて協議会・学習会を行った。岡崎市や安城市からも講師を招き、テーマ発問を取り入れた授業の成果を検証していった。その際、学年で協力して授業案を立て、先行授業―本番授業―指導後の授業を行うことによって、よりよい授業展開になっていった。さらに、各教師が他校での研究会に積極的に参加し、その様子を自校で伝え、全教師が情報を共有した。特に永田先生の関係する東京学芸大学附属小金井小学校には5回訪問した。また、12月には永田先生をお招きして授業研究会を実施した。「テーマ発問」など直接教えていただく

機会を得ることができた。そのことにより、各教師の授業力向上や道徳に対する実践意欲をもつことができた。また他校の実践を共有することで、自校での実践を振り返ることができ、学校全体としてすすめていくべき課題が明確になった。

② お話タイムの実践

水曜日の朝の活動（15分）を「お話タイム」とし、全学年が、学年の実情に添ったテーマで、学級単位（場合によって学年単位）による話し合いを行った。道徳授業よりも、日々の生活の中で児童が考えやすい、答えやすいテーマ（飼育していた金魚が死んでしまったことを考える「出目金について考えよう」など）を取り上げた。お話タイムを通じ、求められる答えではなく、子どもたちが生活の中で感じることを正直な気持ちで伝えることができるようになってきている。

③ 2年生の生活科「明陽苑との交流」

2年生の生活科の活動の一つに明陽苑との年5回の交流がある。校区の施設でもある老人福祉施設「明陽苑」に行き、高齢者と触れ合うことで、身近な人々に関心をもち、自分自身や自分の生活について考えることができる子を育てていくのが目的である。だが、最初は実際の年齢が曾祖父母と同じ方々を目の前にして、前向きな活動ができるか不安なところがあった。道徳の、「おばあさんができたよ」「おじいさんこんにちは」で自分の祖父母でないお年寄りとの交流は勉強していたが、第1回目の活動では、「耳が遠くて聞こえない人がいました」「病気でしゃべれない人や車いすの人がたくさんいました」と普段の祖父母とのギャップに戸惑う子もいた。活動直後の運動会には応援に小学校の運動場まで来てくださり、テントにいる高齢者と話をするなど2回目の交流ができた。

3回目の交流では、「私に気が付いてくれなかったので、とんとんと肩をたたいて、顔を近づけてお話しました」と、1回目では少し距離を置いていた子たちも、じゃんけんゲームや肩たたきで楽しい時間を過ごすことができた。

第4回交流では、伝統の遊びを行った。あやとりや折り紙などを一緒に行うことで一層盛り上がった。耳のそばでやり方をお話したり、おばあちゃんの指にあやとりのひもをかけたりとほほえましい光景がたくさん見られた。

第5回の学習発表会の演技披露の交流では、一緒に笑顔で手拍子を打って喜んでもらっただけでなく、「前にお話したおばあちゃんが、泣いていました」「おじいちゃんが立って大きな声でよかったよ、と叫んでくれました」とおじいさんやおばあさんの喜んでいる姿を見て喜んでいった。今後も高齢者の方々との継続的な交流を通して、相手を思いやり優しく接することができ、喜びを共感できる子どもたちに育ってほしい。

④ 4年生の総合的な学習の時間「飼育活動」の実践

4年生の児童は、アニマル当番を決めて、夏休みと冬休みも含め、毎日、ウサギとニワトリの飼育小屋の掃除と餌やりを行っている。当番の日には家庭でもキャベツや人参など子どもに持たせてくれる。1年生がキャベツの栽培活動をすれば、1年生が自ら飼育小屋まで持ってきている。今の子どもたちの生活から「いのち」を実感することが薄れてきている。動物とのふれあい、世話をすることを通し「いのち」を実感し、「いのち」を大切にする心を育てていくことが、4年生を中心に全校に広がられている。

⑤ 5年生の総合的な学習の時間「生命」の実践

5年生の総合的な学習の時間では、道徳との関連を図れるよう、「生命」を取り上げ、児童自

ら調べる内容を決め、学びを深めていった。哺乳類・爬虫類・魚類・鳥類、花や木など、自らが気になった生命について、インターネットや図書を活用して調べた。また調べたものは個々に新聞にまとめ、発表した。興味のあることを徹底的に調べ、まとめて発表する場をつくることで、みんなに伝えたい、教えたいという意欲が向上した。また、理科や道徳との密な関わりができ、わかったことを生かす場が増えることで、自己存在感・有用感を得ることができるなど、生徒指導にもつなげることができている。

⑥ 5年生の国語の命に関する俳句づくり

5年生の国語「詩と俳句を味わおう」では、「命」をテーマに俳句づくりを行った。命に連想するものを自由に書き出し、伝えたい言葉を書き入れずに、表現を工夫して内容を伝えるよう工夫した。ただ「命」についての言葉ではなく、一步踏み入れた心の中を自分なりの言葉を使う取り組みを通して、一言では言い表せない豊かな表現力を育むことができた。

(3) 家庭・地域との連携における成果

① PTAによる命を取り上げた本の読み聞かせ

年に6回程、始業前にPTAの図書委員による読み聞かせを実施している。図書の選定は学校図書館司書の協力を得て学校図書館や市中央図書館の蔵書から選び、興味をもった子どもたちが後から自分で借りて読むことができるようにしている。

10月に行った4年生の読み聞かせでは、「かわいそうなゾウ」を子どもたちに紹介した。戦争の時代に実際にあった話だということで、PTAの図書委員の方は、当時の飼育員さんたちや園長さんの気持ちや思いが伝えられるように、家で何度も練習をしてきてくださった。オープンスペースでも子どもたちは集中して聞くことができていた。

② 地域の人や家族と稲の栽培

地域の方を中心に、学校の施設を利用して遊びや文化に関する講座を18設け、月に2回、「土曜ひろば」として行っている。今年は、その活動の一つとして稲の栽培に取り組んだ。土曜ひろばの指導者のなかに水田を所有している方がおり、苗を分けていただいた。学校で使用していないコンテナに土を入れて校舎1階のテラスに置き、田植えを行った。残った苗は希望する子どもたちが家に持ち帰った。そのうち、20名ほどの子どもたちは、バケツや植木鉢、発泡スチロールなど身近にあるものを利用して家庭でも稲の栽培に取り組んだ。ほとんどの子は稲の栽培が初めてで、土の準備や水やり、苗を植えた容器の置き場所をどうするかを家族に尋ねたり、一緒に調べたりしながら活動を進めていった。家族で稲の成長を見守ったり、実った稲を収穫して玄米ご飯として食べたりするなかで、植物の生命力や食物の大切さについて考えることができた。

③ 保護者とともに考える命の授業

保護者の方々にも道徳の研究の一端を紹介しようと、6月の学校公開日には校長が保護者向けに道徳の授業を行った。大越桂の二つの詩、「海の石」「花の冠」を題材に、二つの共通点、相違点を考えた。38名の参加者からは、「花の冠」は「陽、自分から行動する感じ」。「海の石」は「陰、他人の行動を待つ感じ」という意見や「未来に希望をもって語りかけている点が似ている」という意見が出た。さらに、大越さんの考える「いのち」については、「自分らしさを発揮すること」「言葉」「希望」「人に何かを与えること」「人との関わりの中で育ち、輝いていくもの」「自ら伝えていくことで、ただ生きている石から周りを動かせる命をもった花になれる」など多くの意見が出て活発な話し合いが行われた。「正解がない中で、他の方の意見をたくさん聞くことができたので、自分の考え方の幅を広げることができました」という感想

を寄せてくださる方もいた。

5 今後の研究計画（今後の課題）

「豊かな心を育み たくましく生きる子どもの育成 ～命を大切にできる子どもを育む道德教育～」を研究主題として取り組んできた結果、以下のような課題が明らかとなった。

（1） 命を大切にできる子どもを育むための道德授業の改善

- ・ 子どもの問題意識や疑問を大切にした発問を設定したり，テーマ発問を積極的に取り入れたることにより，多様な考え方や自由な思考を引き出すことができることがわかった。今後は，子どもの発達段階によって，どのようにテーマ発問を位置付けていくとよいのかを検証していきたい。

（2） 教科・領域における取り組みの工夫

- ・ 命の大切さに気付く体験活動の場や高齢者の方々との交流の場を継続的に確保し，命を大切にしようとする道德的心情をさらに高めていきたい。

（3） 家庭や地域との連携

- ・ 今後も学校からの情報発信を積極的に行うとともに，家庭や地域の力を活用し，連携して命を大切にする道德教育を推進していきたい。